2022年3月26日（土）13:00～　西船場会館

フィンドホーンの奇蹟
～内なる神と妖精たち～

「北スコットランドの一寒村フィンドホーンに、ピーター・キャディと妻のアイリーン・キャディ、三人の子供、友人のドロシー・マクリーンの総勢6人が1962年11月にトレーラーを移して共同生活を始めた。そこで起きた数々の奇蹟は、一体何を物語っているのだろうか。」

棚次正和（京都府立医科大学・名誉教授）

主催：ELSフラワーエッセンススクール

講演の内容

1　ニューエイジ共同体・フィンドホーンとは

2　人間観の変容ー個の自覚を深める

3　自然観の変容ー地球の波動を高める

1　ニューエイジ共同体・フィンドホーンとは

北スコットランドの一寒村に、世界的に知られたニューエイジ共同体「フィンドホーン財団 (the Findhorn Foundation)」がある。

ピーター・キャディと妻のアイリーン・キャディ、三人の子供、友人のドロシー・マクリーンの総勢6人が1962年11月にフィンドホーン湾キャラバン・パークの窪地にトレーラーを移して共同生活を始めたのが、そもそもの事の発端である。

ピーターは、元英国空軍少佐、行動第一主義の実践家。

アイリーンは、父はバークレー銀行支店長。神からのガイダンスを受け取る能力を持つ。

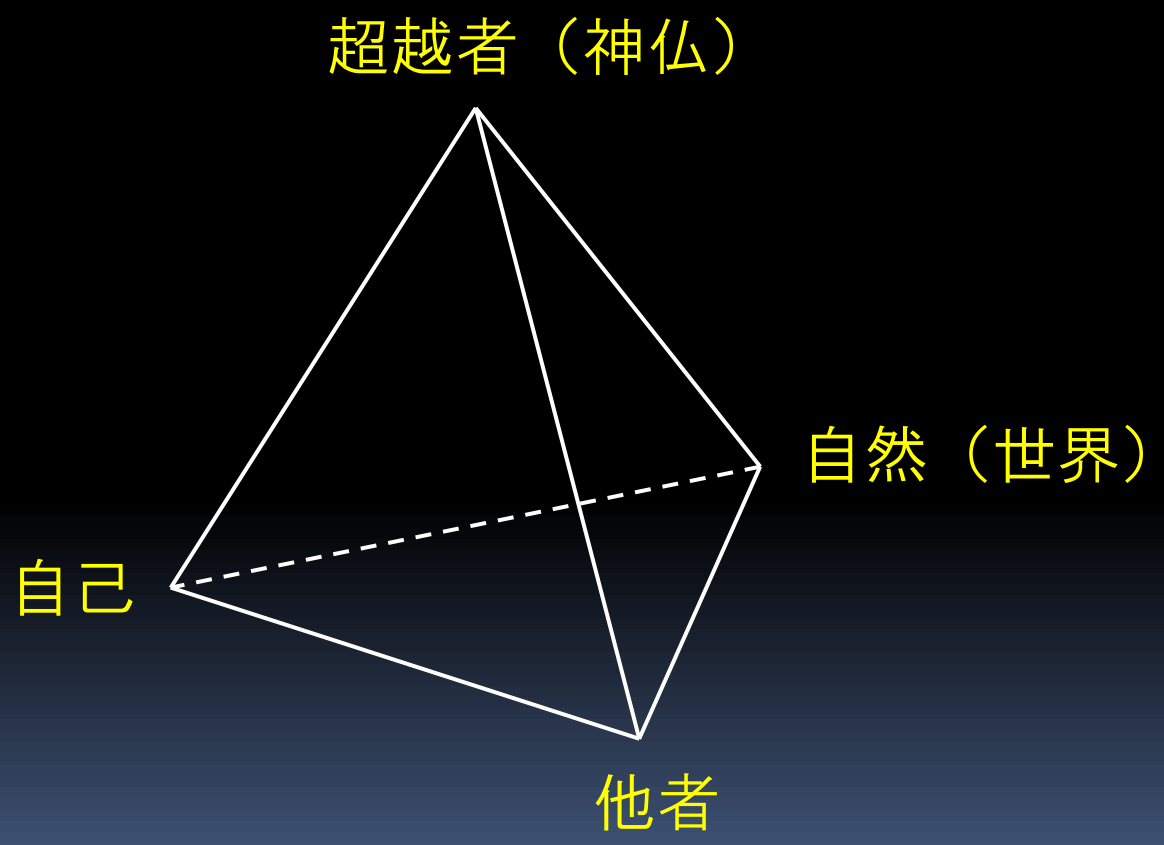
ドロシーは、その二人の関係を見守り、微調整する役割を担い、彼女自身も植物のディーバ（天使）と交信。

後列左から、アイリーン、ピーター、ドロシー、前列は夫妻の息子たち。（写真　フィンドホーン財団）

◆この生活共同体で起きた数々の奇蹟：
アイリーンによる内なる神の声の伝達、
ドロシーによる植物のディーバ（天使）との交信、
ピーターの桁外れの行動力、神秘学に精通
北風吹きすさぶ北スコットランドの一寒村の不毛の地に出現した見事な巨大野 菜と菜園。土壌学者が見学に。

◆フィンドホーンは、なぜ「ニューエイジ共同体」と呼ばれているのか？
「ニューエイジ」は、「オールドエイジ」を支える既成の体制や価値を否定するものとして成立する。占星術的には、1960年代以降、ピッセス（魚座）の時代からアクエリアス（水瓶座）の時代へ移ったとされる。
人類の新しい意識の目覚めが到来する時代。それは自分の内なる神に、個々人が一人ひとり気づく時代だということ。パラダイムシフトは、集団や民衆という特殊レベルではなく、個（individuality)のレベルで展開する。

「自己-他者-自然-超越者」の三角錐
(世界)(神仏)　(四面体)



アイリーンの誕生パーティ、1999年8月

アイリーンの自宅前で、1999年8月

２ 人間観の変容～個の自覚を深める

①「神と人間」の関係、↓ ②「自己と他者」の関係、→
③「男性性と女性性」の関係 ↻↺

◆①「神と人間」の関係が変容する

「わが愛する子よ、 どの魂もこの霊の道を歩んでいく過程で、いつかは自分自身を完全なものとして---わたしと同じように完全なものとしてさえ---見ることができるようになり、悦んでこの真理の不思議さを受け入れられる地点に到達しなくてはなりません。あなたの真実の自己を貶めると、それはわたしを貶めていることになります。なぜなら、わたしはあなたの内にあり、あなたそのものであり、かの実在のあなたなのですから(for I AM within you, I AM you, that real you)。」(GS 20, 訳 28)

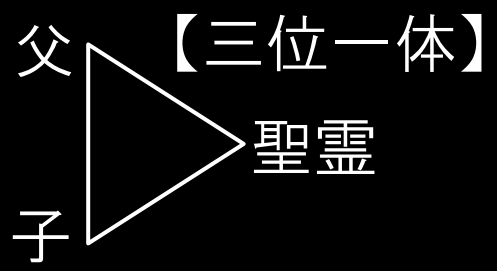
「わたしはあらゆるところにいます。すべてのもののなかにいます。あなたの魂の内にある、あの静けさの内にわたしはいるのです。いつでもわたしを見つけることができます。というのも、わたしはここにいて、呼吸よりも密接し、手足よりも近くにいるからです。」(GS 77, 訳 140)

「あなたの中に二つの部分が存在することはありえません。というのも、わたしたちは一つなのであり、一体であることに気づいて、二つが一つに融け合い、「我と我が神は一体なり。我は神の内にあり、神は我の内にあり(I and My Father are one; I am in Him and He is in me.)」という言葉の意味が十分に分かるようにならねばならないからです。」(GS 94, 訳 172）

※ 神に性別？

【キリスト教の教義】

超越神 (絶対・無限)



イエス・キリスト
（仲保者）

歴史＝永遠

人 間 (相対・有限)

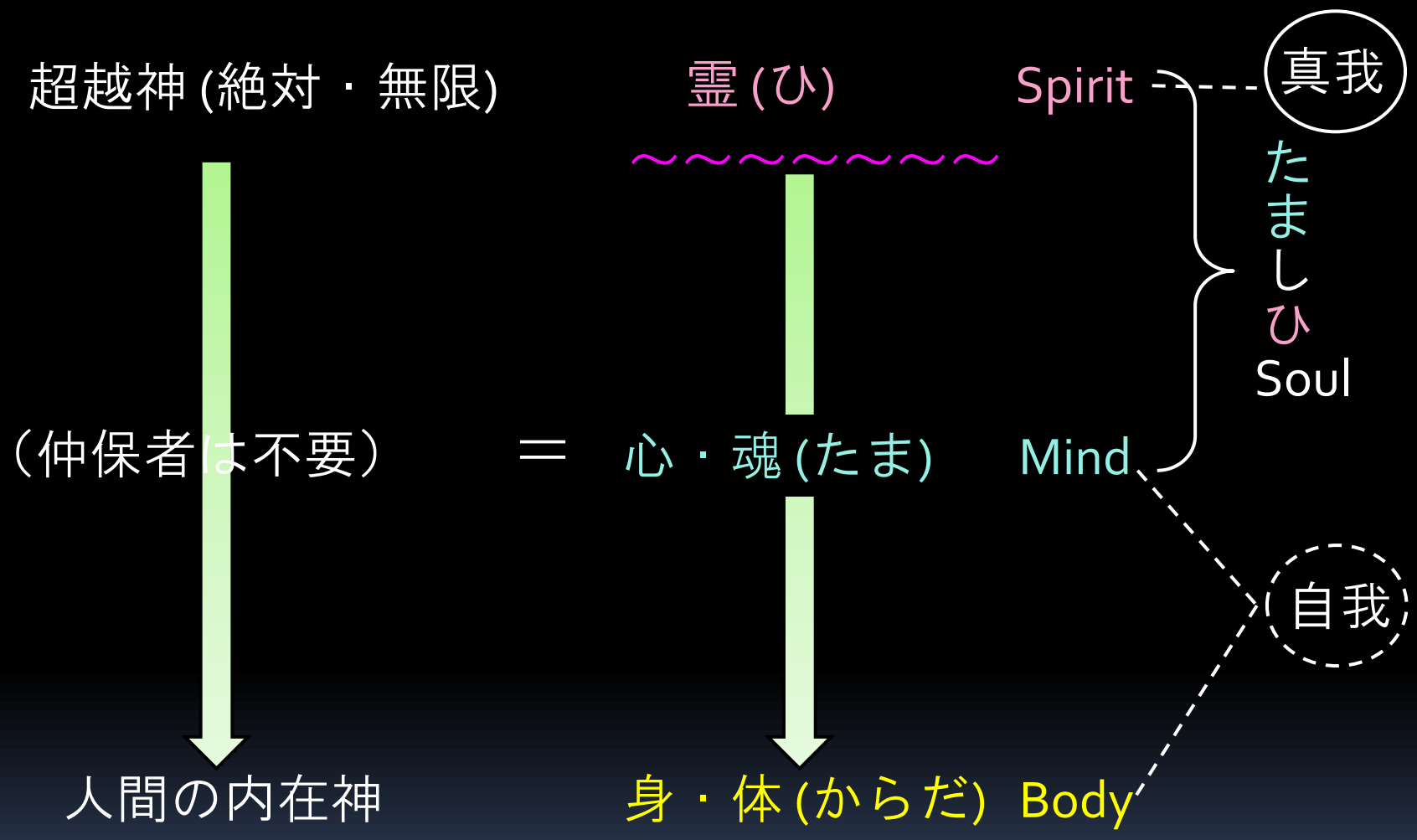
【アイリーンへのメッセージ】

超越神

⇒ （仲保者は不要）

人間の内在神

【アイリーンへのメッセージ】　【人 (霊止) の存在構造】



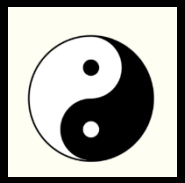
※ 人性三分説 (Trichotomy)
霊の無限 と 心身の有限の双方に跨がっている。

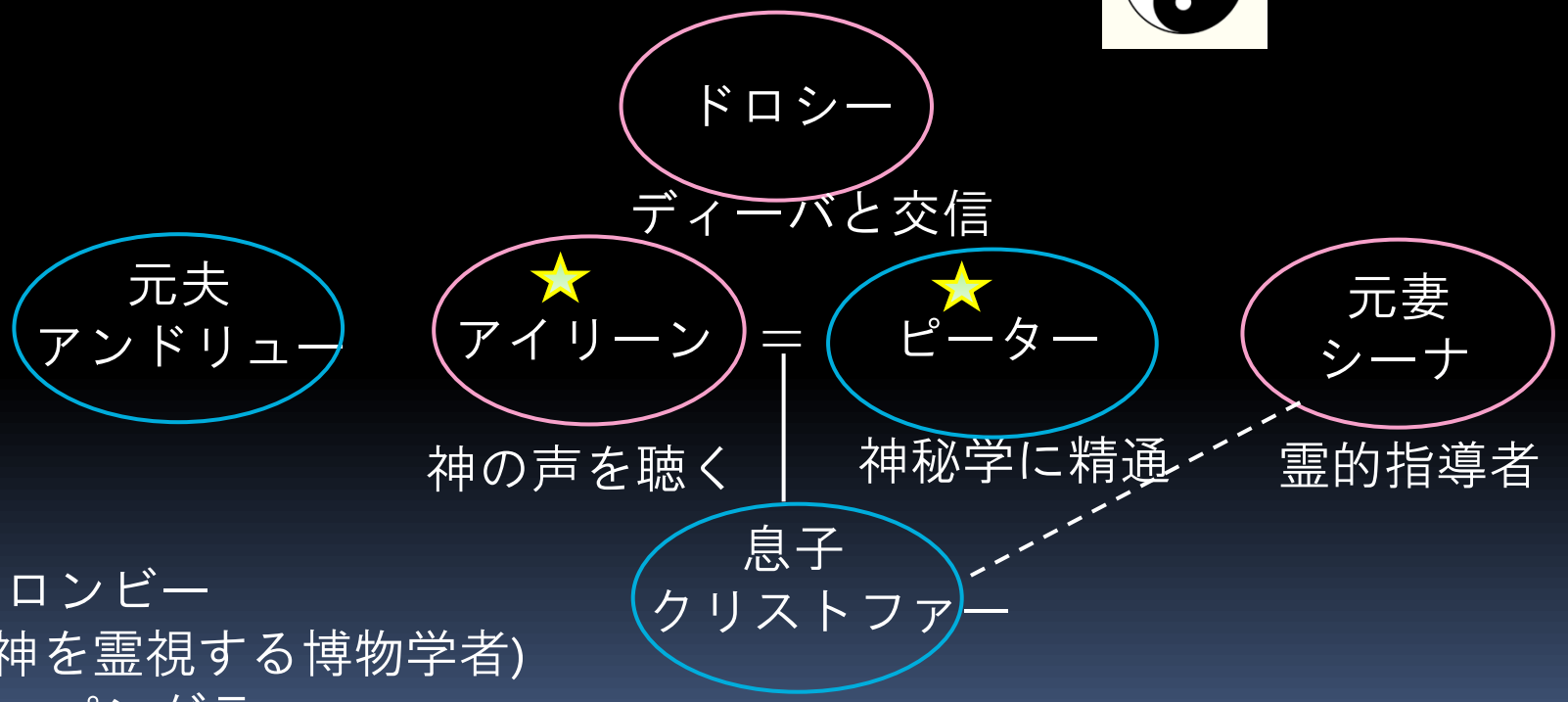
- キリスト（救世主）は、ナザレのイエスのような特定の歴史的人間に同定できるものではなく、人間の内なる神としての普遍的神性、つまりキリスト意識(Christhood)を意味するものとなる。
- 従来の理解では、神の人間化は神の御業・奇蹟、人間の神化は神への冒涜と見られたが、アイリーンの内なる神の声は、「わたしは・・・あなたそのものである」と語る。従来の神観と人間観が質的に変容している。人間は「神の被造物」か、「神の似姿」か。それともその両方か。キリスト教徒が踏み越えることを自重している二重の境界線（一つは神の人間化をイエス・キリストのみに承認すること、もう一つは人間の神化を否認すること）を、アイリーンは踏み越えた。
- 「キリストの再臨とは、一人の救世主が現れることではなく、すべての人々の内にあるキリスト意識を認め、育ててゆくということ」(FF 222, 訳 342)　　＝霊性の個

◆③「男性性と女性性」の関係が変容する

ユングのアニマ・アニムス説---自我意識の偏向を補うために無意識レベルで、男性は現実的情緒的なアニマ(anima 女性魂)を持ち、女性は観念的論理的なアニムス(animus 男性魂)を持つ。

「男性性と女性性の統合」という課題





*クロンビー
(牧神を霊視する博物学者)
*シュパングラー
(ニューエイジ指導者)

- シーナに対するアイリーンの恐怖心・同情心
- アイリーンの「マリア体験」

「あなたはイエス・キリストの母、マリアです」という声を聴く。「マリアの光線の上には、それは沢山の魂があるのです。」何度かのマリア体験。シュパングラーによれば、「マリア原理は、キリストのエネルギーを呼び覚まし、育み、それが人間の本質と一体化するのを助ける」もの。

キリスト意識誕生の世話をする役割を担った宇宙論的意義のあるもの。

「男性原理と女性原理の黄金調和」の実現を目指すニューエイジ。

- 西洋のマリアと東洋の観音との本質的同一性。男性性と女性性が結び合わされ、西洋と東洋が結び合わされるのは、ただ無条件の愛しかないと、アイリーンは気づく。
- ピーターとの離婚（1982年）を契機に、アイリーンは彼女自身の中で男性性と女性性を統合することが課題となり、ピーターへの執着と共に、共同体（いわば彼女の大きな子供）への執着をも捨てて、自立した個となった。「もはや、全体の半分ずつではなく、一緒に仕事をする二つの全体として、二人の関係を見るべき」時節が到来した。

３ 自然観の変容～地球の波動を高める

①隠れた自然界： ディーバ(deva 天使) と精霊
②地球の次元上昇：身体の霊化、天地のエネルギー融合

◆①隠れた自然界： ディーバ(deva 天使) と精霊

　ドロシーは瞑想中に依頼された「自然の精霊との協力」という新たな仕事に取り組んだ。植物の精霊や大地の精霊との交信を始め、畑の作り方や水やりや肥料のこと等の疑問に対する答を受け取った。彼女がディーバと呼ぶそれらの存在は、「さまざまな文明によって、それぞれ違った形で表現されてきた＜すべてを知るエネルギー＞」であり、創造のあらゆる形を司る原型的な計画とパターンを持ち、エネルギーを統制しながら、「神の計画」における自らの役割を果たしている、定形なく絶えず変化する「エネルギーの場」であった。「植物の種やあるグループを代表する魂の知的本質」。（ルパート・シェルドレイクの言う「形態形成場」と同じものと推察されている。）彼らと同じ世界を共有しているから、愛と感謝があれば、誰でも彼らと交信することができる、とドロシーは言う。

精霊、妖精、自然霊、ディーバ、天使
elemental, fairy, natural spirit, deva, angel

「天使たちは、自然とかかわりあうことの大切さを教えてくれましたが、それ以上に、真の自分自身を私に思い出させてくれました。彼らは時間と空間を越えてすべてを見通し、しかも人間のもつ限りない可能性を認めています。愛とともに歩むとき、人間がすべての生命を向上させる創造力にあふれた存在であることを、彼らは知っています。」（ドロシー）

まず最初に「思い」があり、そこから「生命の原型」が生まれる。その原型は天空のいたるところに存在するが、それに衣を纏わせるために、基本要素（地・水・風・火の四大エレメント）は自らを与え、この時空の世界に姿を現すことになる。（ドロシー）

- すべて の形ある ものを、輝きを発している光から作られたものとして見るという「光の視点」。　　光→物質

- ディーバや妖精からのメッセージは、自然界の内奥に隠された生命の息吹を伝えるのみならず、人間が宿している創造力と愛を喚起することにあった。

- それらは人間の存在構造の一部と内密に共振し合っているだろう。ちょうど、人体の内に鉱物的要素が骨や爪などの質料形成的な部分として組み込まれ、植物的要素が血液やリンパ液などの体液として流れ込んで新陳代謝を繰り返し、動物的要素が本能や感覚や快・不快などの仕方で発現しているのと同じように。

- ドロシーは、この四つのエレメント(地・水・風・火)を「火はエネルギーに、風は空間に、水は時間に、地は物質に対応する」と見ている。E＝ mc^2（エネルギー＝質量×光速の二乗）

火　　地　　風水

R・シュタイナーの妖精論

gnome　undine　sylph　salamander

	地の精 グノーム	水の精 ウン ディーネ	風の精 ジルフ	火の精 サラマン ダー	
自我				△	人間（？体）
アストラル体			☽	△	動物（気体） 第２エレメンタル界
エーテル体		○	☽	△	植物（液体） 第１エレメンタル界
物質体	□	○	☽	△	鉱物（固体）
物質－１次元	□	○	☽		
物質－２次元	□	○			
物質－３次元	□				

◆②地球の次元上昇：身体の霊化、天地のエネルギー融合

- 「身体の霊化」：
  食事を肉食から菜食へ（繊細で細やかな密度の身体）、瞑想の実践、作物の栽培法（土地の中にエネルギーを注入）などにより「光の肉体」へ改造。

- 「地のエネルギーとキリストのエネルギーの融合」：
  「身体の霊化」の地球版。磁場センターの建設（アイオナ、グラストンベリー、フィンドホーンという三つの光のセンターの結合）。「地」は大地であり、四大の地であり、地球である。「キリスト」は広義には「人類の普遍的霊性（神性）」を意味する。

両エネルギーの融合は「天地一体」と同じこと。天と地とは、天空と大地、太陽と地球、大宇宙と小宇宙、理想と現実などの象徴である。個々人の内的神性の自覚のグローバル化を指標とした、地球規模の一大転換にかかわる宇宙論的出来事と見られており、次元上昇(ascension)とも呼ばれる。いずれも、人間や自然の事物を「光」や「波動」の観点で見ることを要求する。宇宙の森羅万象は、諸々の波動の離合・集散によって形成されたものであり、地球は、それらの集積としての生命体「ガイア」である。

⇒　<u>地球の波動を高める</u>という共通目的

- 人間観の変容：個の自覚を深める

  神と人間の関係 ⇒ キリスト（神性）意識の誕生

  男性と女性の関係 ⇒ 男性性と女性性の黄金調和

- 自然観の変容：地球の波動を高める

  地のエネルギーとキリストのエネルギーの融合

  「光」と「波動」の観点で 物事を捉える こと

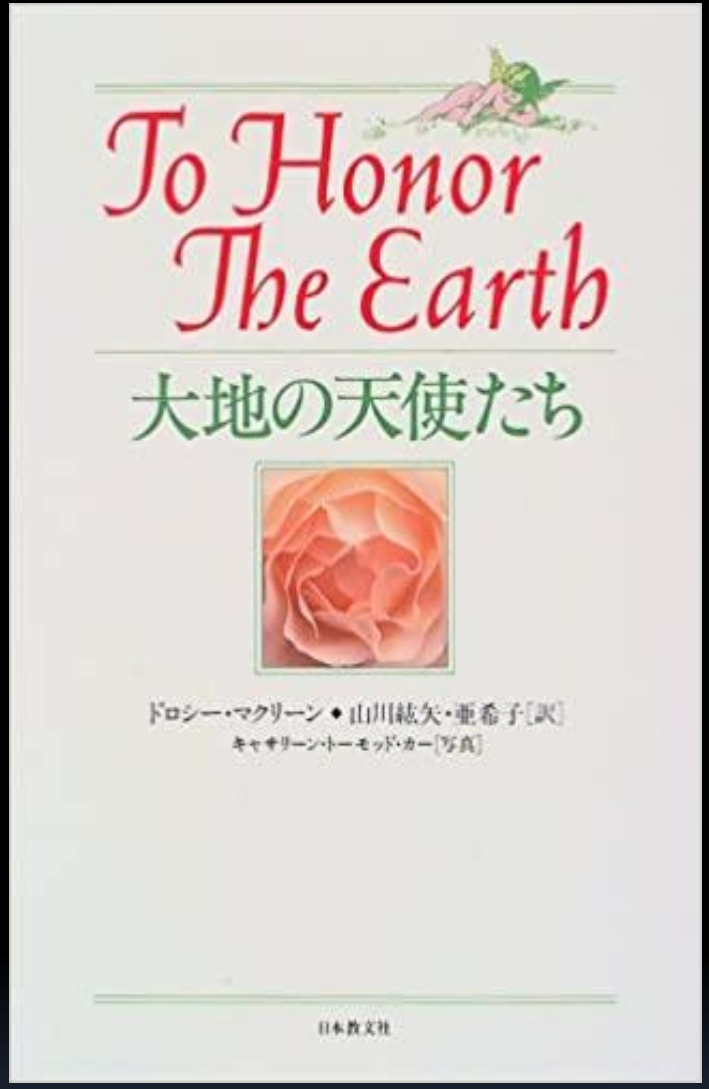
  （⇨物質）（⇨粒子）

「フィンドホーンが実践しようとしている生き方はとてもシンプルで、＜内なる神に従うこと＞と＜自然との協調＞のふたつです」と、寺山心一翁氏（フィンドホーン財団の唯一の日本人の評議員）は語っている。

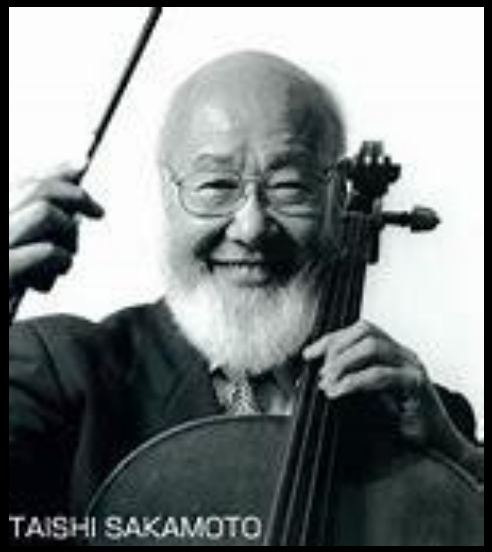
「フィンドホーンを見よ」（英国土壌協会のバルフォア女史）の合い言葉。実は、私たちが「ここでいま」立っている場所がフィンドホーンたりうることに気づくべき。

Behold Findhorn！　　Be here now!

アイリーン・キャディ（山川紘矢・亜希子訳）『フィンドホーンの花』（日本教文社、1994年）
アイリーン・キャディ（川瀬 勝訳）『神は私にこう語った』（サンマーク出版、1998年）



ドロシー・マクレーン（山川紘矢・亜希子訳）『大地の天使たち』（日本教文社、1997年）。
ポール・ホーケン（山川紘矢・亜希子訳）『フィンドホーンの魔法』（日本教文社、1995年）。



寺山心一翁(てらやま しんいちろう)

1936年東京生まれ。チェロを故鈴木聡に学び、早稲田大学で物性物理を学んだ後、東芝に入社して半導体素子の開発に従事。1984年腎臓ガンの摘出手術後、抗がん剤等で悪化。数カ月の命と宣告されるも、ホリスティックな癒しで自然治癒する。チェロを片手に、ガンの自然治癒の講演や指導を行なう。フィンドホーン財団評議員、サトルエネルギー学会理事、日本ホリスティック医学協会元常任理事など。

寺山心一翁『フィンドホーンへのいざない』（サンマーク出版、1998年）

棚次正和「フィンドホーンの奇蹟」、荒木美智雄編著『世界の民衆宗教』(ミネルヴァ書房、2004年)、361-377頁。

棚次正和「フィンドホーンの奇蹟」、『超越する実存』(春風社、2014年)、274-303頁。

棚次正和「女性性と霊性」、『新人間論の冒険』(昭和堂、2015年)、125-146頁。